

教訓

3・11

建て替えて記憶継承

古学校地域の木製避難碑

大槌町



盛岡市

「大きな地震が来たら戻らず高台へ」。大槌町安渡地区の通称「古学校」地域の住宅地に、津波避難を呼び掛ける木製の碑が立っている。ただの記念碑ではない。やがて朽ちる木材をあえて使い、住民自身が建て替えていくことで、避難の教訓を風化させまいという「逆転の発想」を込めた碑だ。

大槌町は震災発生時、同町米町の友人宅にいらした。地震の後、町の空気が一瞬、止まった感じがした。

「街は壊れてきたのに、自宅など低い場所に戻って亡くなる人は少なくない。津波の記憶も少なくない。『戻らず』の表現が一番のポイント」それが責務と感じ、説明する。

ただ、形を残す取り組みに、同町安渡の小国忠義さん(72)は「若者の頑張る姿がうれしかった。いつまでも忘れないためには、住民自身が行動にして、教訓を継承したい」と期待する。

「実は自分の中で、人と相談した結果が、建風化が始まっている。ぼうぜんとして替える必要はない。ぼうぜんとして替える必要はない。ぼうぜんとして替える必要はない。」

大槌高2年の吉田優作君ら地元高校生が中心になって企画、今年3月11日に設置した。場所は津波が到達した最高地点付近。コンクリート製の土台を含めて、高さ約2・4メートル。資材は地元建設業者などから提供してもらい、建立に地

避難した公民館で、津波が町をのみ込む様子をみた。泣き叫ぶ人たちが、を伝える石碑が立っていた。吉田君自身、石碑があった同町末広町の広場付近でよく遊んだが、内容までは特に意識しなかったという。「石碑が立つ理由もよく分からなかった」と悔やむ。

町内の中高生向けに民間団体が開く「放課後学」の友人3人とともに、地域住民と津波の記憶を継承する意見交換会を今年1月から始めた。碑の文言はこの話し合いから導き出した。

吉田君は津波の教訓を踏まえ「一度は高台に逃

古学校地域 かつて地域に学校があったのが名前の由来とされる。東日本大震災では民家約60世帯のうち約半数が流失、住民12人が犠牲になった。地域内の高台には仮設住宅団地が整備され、「コミュニティスペースのテント」「ふれあいドーム」で月に数回、住民主体のお茶会の会などが開かれる。

(随時掲載します)



「建てて終わりじゃない」と木製の碑の前で決意する大槌高の2年生。(左から)吉田優作君、小林寿美さん、佐々木郁実さん、黒沢菜緒佳さん=大槌町安渡

「手間」が命をリレー

焦点

復興が進めば町の様相は大きく変わる。震災の記憶を一人一人が胸に刻み、残すこと。津波を知らない未来世代への責務でもある。単にモニUMENTを残すだけでは、その存在すら忘れられてしまいかもしれない。数百

木製の碑を建てること自体がゴールではない。建て替えることを、相は大きく変わる。震災の記憶を一人一人が胸に刻み、残すこと。津波を知らない未来世代への責務でもある。単にモニUMENTを

吉田君らは記念碑に、腐って朽ちていく木材をあえて用いることで、建て替える地域の行事として継承することを目指している。「形」ではなく「行為」そのものを後代に伝えるという手間は掛かる手法は、現代では逆

いわて 東日本大震災